三重短期大学地域問題研究所 通信 第133･134合併号　　2019年 2月28日 ISSN1340-5780

地研通信

発行人　立石　芳夫
編集人　駒田　亜衣
発行所　三重短期大学
地域問題研究所
津市一身田中野157番地
〒514-0112 TEL(059)232-2341

題字　岡本祐次元学長

第58回地域問題研究交流集会報告(要旨)

2018年10月27日(土)の午後1時30分から三重短期大学 45番教室において第58回地域問題研究交流集会が本学の地域連携講座との共催で開催されました。

本学の小野寺一成准教授をコーディネーターとし、学外から野嶋慎二先生（福井大学大学院教授)、樋口秀先生（長岡技術科学大学大学院准教授)、浅野純一郎先生（豊橋技術科学大学教授)、松浦健治郎先生（千葉大学准教授)、内田奈芳美先生（埼玉大学准教授）をお招きして、「地方都市における持続可能な“コンパクト+ネットワークシティ”の形成に向けて」をテーマに講演とパネルディスカッションを開催しました。一般、学生など約50名が参加しました。今回の地研通信では講演の様子を掲載いたします。

小野寺

本日コーディネーターを務めさせていただきます。小野寺と申します。よろしくお願いします。本日の講師を紹介いたします。建築学会というものがありまして、その中に都市計画委員会というものがあって、さらに地方都市再生手法小委員というもののメンバーが12名ほどいるのですけれど、その中でいろいろ活動してきて今日はその中から5名の先生方に来ていただきました。簡単に大学名とお名前だけ紹介させていただきます。一番左から福井大学の野嶋先生、続きまして長岡技術科学大学の樋口先生、そして豊橋技術科学大学の浅野先生、千葉大学の松浦先生、そして最後が埼玉大学の内田先生です。

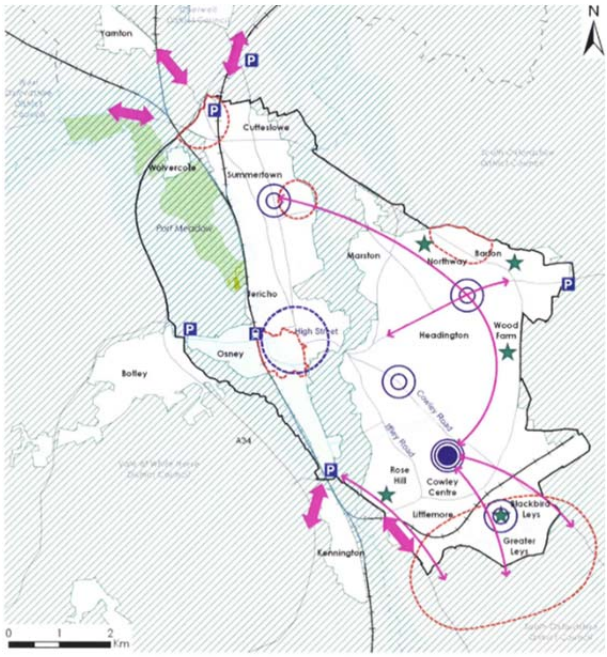
本日はプログラムを見ていただくと分かりますように第一部と第二部の二部構成になっております。その間の休憩時間に質問を書いていただいて二部はできる限りその質問に答える形でパネルディスカッションをしたいと考えています。第一部は5名の

先生方が 15 分ずつですけれどもパワーポイントを使って連続して説明して計 1 時間 15 分お聞きいただくことになります。では、早速ですけれども福井大学の野嶋先生からお願い致します。

「都市構造からみた拠点とは何か、
拠点の立地と役割」
福井大学　野嶋慎二

野嶋

みなさんこんにちは。福井大学の野嶋です。よろしくお願い致します。私の方からは「都市構造的にみた拠点とは何か」ということで総論的なことを話させていただきますのでちょっと駆け足になってしまい分かりにくいかと思いますがご容赦いただきたいと思います。時間がないため早速本題に入らせていただきますと今回のテーマでもあります「コンパクト＋ネットワークシティ」ということで、拠点ということですけれど、防災拠点、交流拠点、子育て拠点とかこれまでいろんな拠点があったと思います。そういった研究をされてきましたけれど都市構造的にみた拠点とは何か？というのはあまり語られてこなかった現実があります。実はこれはコンパクトシティということで西欧の都市構造の理念を割と影響を受けて日本に輸入してきたというところがございます。コンパクトシティというとどうしても中心市街地を一ヶ所に集めるんだ。要するに都市を縮小してしまうというふうに勘違いされた時期がございまして、政治的には非常に不人気だったんです。まさに郊外切り捨てなんじゃないか？ということを思われる方もたくさんいて、だけれどもそうではなくてということで核を郊外にも作ってそこに集約させて、そこはそこで元気にしてそれを公共交通でネットワークして結ぶという、富山が先進的と言われていますけれどそういった都市構造が注目されてきたところでございます。だけれども現実の多核ネットワーク構造で我々が暮らしているかというと別な話で、これは将来の理想の形ということになるかもしれません。

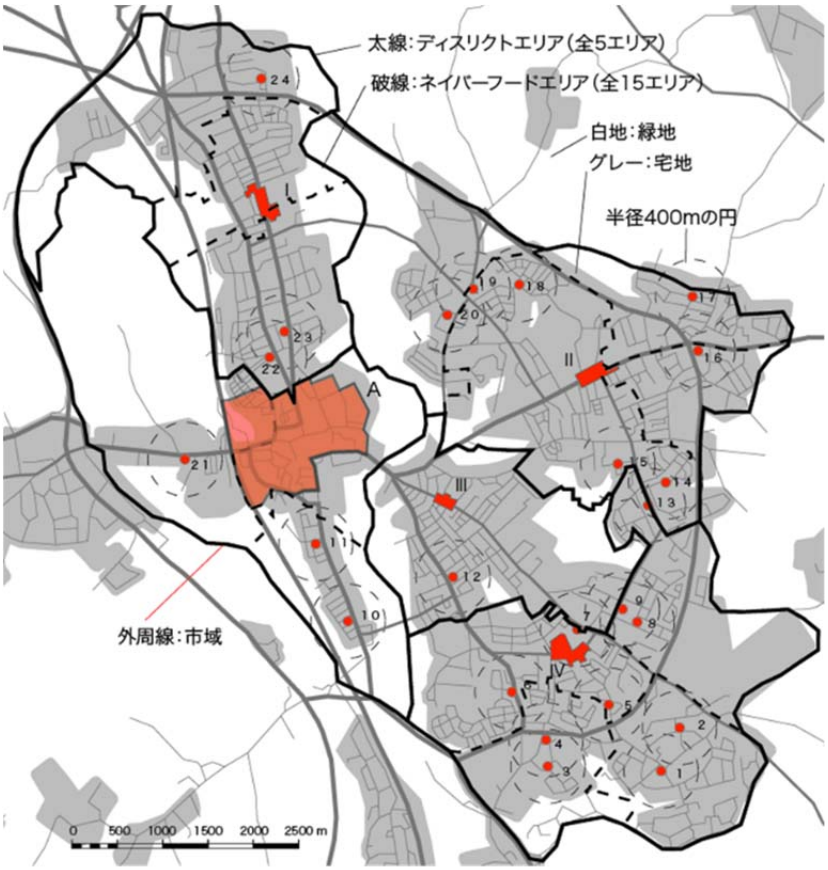


Oxford Core Strategy

いきなりオックスフォードと出ていますけれど影響を受けた西欧のコンパクトシティというのはどうなっているのか？そしてこちらの立地適正化計画という日本の「コンパクトシティ＋ネットワーク」を作っていこうとする計画が全国で作られているん

ですけれども何が違うか比べてみますと、バス路線とか公共交通の路線に青いところ、つまり人々の住む場所を集めましょう。赤い丸は福祉施設とか公共施設とか都市機能を集めましょう。そうすると歩いて行ける街ができるのではないか？よくフィンガープランというんですが手の指の先のような形をしていると合理的なんじゃないかということで目指しているわけです。一方でオックスフォードは分かりにくいですが、この図で緑のところが家が建っていないところで白いところが家が建っているところですけれど、こういうところにバスの路線が張り巡らされていましてまさにフィンガープランになっているんですね。中心市街地があって今日のテーマでもある地域拠点もあって公共交通も放射状にネットワークで結ばれている形なんです。これは同じじゃないのか？という話ですけれど形としては同じですけれど何が違うかというと、今オックスフォードは現実的にこういうふうに成長してきてこういうとことは家が建っていなくて、こういうところに拠点が形成されてきてそれを守っていこうという計画になってきているわけですが、一方でこっちは実際にこういうところは逆に過疎化が進んでいてこういった郊外住宅地に人口が増えていて人々はこういう黄色いところに住んでいるわけなんです。実際住んでいるところで今こういったフィンガープランに変えていこうというところが決定的に違うところだと思うんです。

もう少しこれを紐解いてみますと、オックスフォードというのはシティセンターという中心市街地の大きなものがございます。ディストリクトセンターという日本の地域拠点と言われるようなものがディストリクトセンターと言って4箇所くらいあるんですが、これはバス路線で結ばれていて公共交通だいたい5分に1本くらいのバスが来て歩いて暮らせるということになっています。もう一つネイバーフードセンターという24か所くらいあるものこれは何かというと、例えば日本でいうコンビニみたいなものですけれども歩いて行けるところに小さい点々が無数にありますけれど、歩いて行ける範囲で日常の買い物ができるような場所、ミルクが買えるような場所と言っていますがこういう場所が段階的にあるというのが現状です。シティセンターというものは一番大きなもので広い範囲から人々を魅了するような場所で歴史的な中心でもあって娯楽や商業があって仕事もできて住む場所でもあってアクセスも良いというものがシティセンターでございますし、ディストリクトセンターというのはもう一歩下の段階で商業やサービスはあって、社会奉仕やコミュニティ、文



化的な活動もあり良好な交通網もあって買い物などにも行けるスーパーやコミュニティセンターや教会などがあるということになっています。これはひとつのディストリクトセンターの良い例ですけれど例えばこういったところで公共交通が放射状にありまして都市施設が診療所やスーパーとか生活するものがあって、人々も住んでいて、もう一つはこういった緑の場所と言いますかアメニティな場所があって歩いて楽しめるというのが一つの大きな拠点の役割なのかなと思います。どちらかというとこれから目指そうとしているのはショッピングセンターとかなかなか歩いて拠点へ行けなくて車で行ってという話なのですが目指しているのは歩いていけるようにということになると思います。ネイバーフードセンターというのはコンビニとか郵便局ですとかが集まっていて診療所ですとか子どものための施設、託児所みたいなところですとか公的施設があって一つのユニットになっていてこういったところに歩いてや車で来ることのできる日常の場所にしているというようなことで拠点といってもいろいろあるねということだと思います。これくらいのところをネイバーフードセンターとしているところもあるんですね。空き店舗も当然でてきている状況でございます。

一方で、いま全国自治体で立地適正化計画というのが制定されていますけれど、24都市を紐解いて見比べてみたのがこの図ですが、例えば大都市があって大和市とか大都市圏内の割と人口10万とか20万とかそれくらいの都市と例えば一元化して申し訳ないですが樋口先生の住まわれている長岡市、同じくらいの人口ですが見てわかるように広さも全然違うわけです。この中に鉄道路線と6個くらいの拠点のある街とこういう合併前の旧市町村を中心に位置づけているような街と同じ「コンパクトシティ＋ネットワーク」と言っても違うんですよね。こういうところというのはそこから鉄道が頻繁にきていてそこに暮らして大都会へ行くというのがあって拠点というのが機能しているんですけれど、福井もそうですけれど旧合併前の中心というのがなかなか今衰退してきていてそういったものをこれからどうしようかという中のコンパクトシティの形というのは随分違うのではないのか寧ろ福井もそうですけれどショッピングセンターへ通ってというような拠点はなかなか機能していないというのが現実なのかなと思いますので都市によって随分違うんじゃないかということだと思います。例えば大和市、流山市などは駅周辺にこのように拠点を位置づけるとだいたい市全体がカバーされてしまうんですね。だからこういうところで歩いて暮らせるとまでは言いませんけれどそういったものに近い拠点が成り立っているのはありますし、藤沢市というのは駅を中心に拠点を位置づけているのともう一つ公民館区に一つずつ拠点を位置づけていてこの拠点というのは何なんだというと公民館＋支所を併せたような行政サービスの拠点をすごく大きな拠点ですけれどもこういうようなものを作って行政サービスを行っていこうという割とコンパクトなところで計画ができているというのは大都市周辺というのはあると思います。こういった複合化しながら公共施設を集約化しながら拠点を作っていくというのがあります。

駆け足で申し訳ないのですがニュータウンについても津は結構ニュータウンができていると思いますけれど、こういったニュータウンに例えば病院なんかが来ますとそこに人が住み始めて店舗もでき始めてだんだんと拠点化していくという拠点もあったりしてニュータウンのようなところをどうやって拠点に位置付けていくかということも一つの方法だろうなと思われます。いろんな拠点があって一方で公共施設のような支所ですとか公民館は位置づけやすいですけれど民間施設はなかなかコントロールが難しいわけです。ショッピングセンターを

そこに配置しろと言ってもなかなかできないのですけれど、これをやっているのが弘前という街で商業圏１万人くらいに一つスーパーを置くように位置づけているわけでして、こういったところで歩けるとまではいきませんけれどなるべくエリア、エリアに商業を置いていくようなことをやろうとしています。例えば古い商店街に新しいショッピングセンターができて古い商店街とセットの拠点を位置づけてこれをセンターにしていくなんていうのは現実の拠点にかなり近い拠点なのかなと思います。金沢もそういった商業を位置づけているというところでは変わりなくていろいろ近隣商業型とかショッピングセンター型とかいろいろありますけれど、飯塚市のところはとばさせていただいてこれも公的施設を位置づけているパターンです。東近江市になりますとこういったところというのは集約するならこちらのほうだということが立地適正化計画で決まっていてどちらかというと集約されない場所にあたります。しかし、このコンパクトシティを作るのは一日でできるのではなくて何十年かかってやるわけなのでそういうところはどうするのかという話になります。そういうところを担保すると言いますか行政サービスあるいは民間サービスの拠点として位置づけようとしているんですがそういった拠点の作り方も良いと思いますが実際機能するかどうかは考えていかなければいけないところなのかなということでございます。

最後に利用圏域の違いによる拠点の役割というものがいろいろあるということです。例えば駅などは公共交通の拠点ですので大きなものですし、ニュータウンや特に圏域が決まっていないような拠点というものがあると思います。こういうところには車で来るかもしれません。一方で行政区分としての圏域として先ほどの公民館区ですとか中学校区ですとかそういった一つずつあった方が良いような例えば公民館ですとかコミュニティセンターですとか支所・出張所そういったものを位置づけているというような都市が割とたくさんあります。しかし、こういったものが現実の拠点としてショッピングセンターがこの辺にあるのにこういうものと離れているのはどうするんだという話もありますし、こういったものを一緒に近づけながら複合化しながら公共交通のネットワークを作っていくというようなことがこれから多分行われることなのかなと思います。最後にそういったものとは別にいわゆるコンビニみたいなもの、郵便局ですとか診療所ですとか特に行政の区分とは関係なくて近所にあればいいねというものがあると思います。この中にあるのがふさわしいというようなそういった機能もありますのでそういったものを本当にこれからコントロールできるのかどうかといったところがなかなか難しいところではございますがそういうところも含めてこれから議論をしていかなければならないのかもしれません。

ちょっと早口になって申し訳ございませんが私からは最初に総論ということで拠点とは何かということをご説明させていただきました。どうもありがとうございました。

小野寺

野嶋先生ありがとうございました。15 分間という短い時間で申し訳なかったのですけれど、拠点のそれぞれの役割、これからどういうふうにしていけばいいのかというようなお話だったと思います。本日の議論の背景として、日本の社会が 2008 年以降人口が減ってきて超高齢化社会に入ってきているという状況の中で都市として成り立っていくために、まちづくりをどのように行っていけばいいのかなと考えています。

次は長岡技術科学大学の樋口先生お願いします。

「連鎖型再開発による
長岡市中心市街地の拠点形成」

長岡技術科学大学　樋口　秀

樋口

皆様こんにちは。長岡技術科学大学の樋口と申します。私、実は津には初めて来させていただいたんです。皆さん新潟県の長岡市というのはご存知ですか？行ったことがあるという方おられますか？いらっしゃいますね。ありがとうございます。知っているよという方は？大多数の方がありがとうございます。安心いたしました。津からですと私は東京から乗り継いできたんですけれども新幹線で5時間くらいで来られます。ちょっと日帰りは難しいかもしれませんけれどぜひ長岡の方へもお越しいただければと思います。

野嶋先生の方から拠点の理論的なお話がありましたが、私は一つの事例として長岡のシティセンターといいますか、長岡がどんなことをやっているのかということを皆様にご紹介したいなと思います。ぜひ、いろいろ批判していただきながら一緒に拠点ってどうやって作ればいいのかなと考えていけたらなと思います。皆さん長岡ご存じでいらっしゃいましたが、簡単に説明してその後、中心市街地の歴史的経緯を津と少し似ているかなということでお話させていただきます。そのあとボロボロになってしまった中心市街地を今一生懸命市民と一緒になって再開発を繰り返しながら中心市街地を作り直しているというふうに考えていただけるといいと思います。集めるとか集約するというよりも直しているというのが長岡の取り組みかと思います。

長岡ですけれども今年の花火が全国に生中継されました。毎年8月の2日3日ということで、あとで少し出てきますけれども戦争の空襲で焼け野原になってしまいまして8月1日の空襲の翌日に戦争で亡くなられた方への追悼の意味を込めて毎年この日で曜日に関係なくやっています。2万発くらい打ち上げてこれはフェニックスという花火。津にもフェニックスというという通りがあるということでちょっとつながりを感じております。

これは長岡の「長」という字を模ったものです。長岡は津と同じ城下町でここにお城があって二之丸。あとで出てきます市役所は実は今この場所に建っています。じゃあこの中どうなっているんだというと、ちょうどこの上に新幹線の駅があります。ここに本丸があって、こちらにアオーレという施設。中心市街地というとこの部分です。要するにお城の中に商店街があるということです。この本丸があったところに長岡の駅があります。これは空襲にあった翌年ですけれども見ていただくとお分かりのように何もないですよね？残っているのは病院や裁判所くらいであとは焼け野原になってしまっている。ここに戦災復興の土地活性事業を入れまして大手通り、商店街といわれるところの都市基盤を整えました。長岡駅の前に中心商店街がありましてここに昭和50年くらいになりますと大型店が1つ2つ…5つ、昭和の最後にもうひとつ出来たり、駅の中にショッピングセンターができたりかなりいろんなところに人が来る仕掛けができてきたんです。ただ見事に平成16年くらいに全部閉店と大きな墓場みたいな建物が一杯になってきたんですね。このままじゃどうしようもないだろうということで何とかしなければいけないということに

なったわけです。再開発でビルを作り直していったんです。ちょっと話を戻しますと中心市街地が元気でなくなってきた頃に平成9年頃ですけれども地下に駐車場を作りアーケードを建て替えて全部で200億くらいかけて作り直しました。ところが皆様のお手元にあると思うんですけれど、一生懸命やったところがオレンジ色のところですけれど効果がなくてどんどん人がいなくなってきたということで、これはアーケードを直した後ですけれどもほとんどシャッター街ということになっていました。このままではいけないということで行政と一緒にみんなで立ち上がって中心市街の構造を変えていこうと考えたわけです。その時に何をしたかというと中心市街地に商店がたくさんあったんですけれども、これからはこういうだけではダメでしょということで居住ですとか文化交流ですとか学習、交通機能と今回のシンポジウムの中ではあまりお話が進まないかもしれないですけれども交通とかそういう機能も大事にしましょうと、あと医療、福祉機能こういうものがワンセットになっていると中心市街地に人がたくさん来て下さるんじゃないかということで、キャッチフレーズがまちなか型公共サービスとしたわけです。これを実現させるためにさっきの空き店舗たくさんあったんですけれど、それを建て替えることによってそれぞれの機能をその建物に入れていこうというふうにしました。そして最後は公共サービスの展開となっていきます。これを平成18年から22年の間にいろいろやっていこうというふうになっていたのですが、皆さんご存知かと思いますが平成24年に中越地震という非常に大きな災害がありました。この復興にもあわせてフェニックスという花火は上がっていたりするんですが、そんな地震の復興に時間がかかりなかなか街づくりが進まなかった部分もあるんですけれど、大型のビルを建て替えていきます。その時に住宅を入れたり店舗を入れたり、長岡の場合はそこに公共公益施設を戻して皆さんに使って頂こうというふうに取り組みをやってきました。これが全体像です。

先ほど言いましたように本丸のところに長岡駅があり、市役所も戻しました。これが再開発ビルです。駅からそのまま来られるようにしてあります。こちらは再開発ビル2棟分です。こちらは住宅のほか、まちなか子供絵本館というものが入っていたりします。こちらは後で出てきますが、まちなかキャンパスが入っていて人が結構来ら

れる仕掛けになっています。こちらはまちなかキャンパスの平面図で、こちらのフロアの半分が市役所であと6階7階8階が市役所になっています。低層の5階の半分と3階4階は市民が使えるスタジオですとか多目的スペースとか調理室なども入っていまして、基本的に市民がインターネットとかで事前に利用予約ができて使えるということです。例えばこれはできた直後ですがご婦人の皆様がスタジオで踊りのお稽古をされたり、これは4階部分でみんなが使えるところですけれども、いろんな勉強会をされたり会議室で研修などを行ったりしています。こういうのをこれは4階にもありますし1階にもありますけれども朝の9時から夜の10時までこの団体はここからここまでということで使用状況がわかりかなり切れ目なく使われていたりするわけです。これは市民であればインターネットで予約できるんです。「まちなかキャンパス利用許可書」ということで私が借りた時のものですけれど、普通に借りると13,500円かかるんですけれども市民なので全額減免ということで0円でここを使わせてもらっています。こういう施設があって先ほどのように切れ目なく利用されていますのでたくさんの方が来ていただけるきっかけになっております。こちらは市役所もまちなかに戻ってきたという部分ですけれども、先ほどちょっとお話ししました中越地震で被災したのがこのアリーナ部分です。この体育館も昭和33年にできていてだいぶ古くなってきているのでこれを何とかしなくてはいけないというのが構造改革会議の提案だったんですけれどここを建て替えるときに市役所がこちらに戻ってくることになりました。今まで市役所はどんどん外に出ていたんですけれどここに戻してきたということになります。駅から直結で市役所に行けます。さっき言ったまちなかキャンパスはこの辺にございます。

これはアオーレ長岡の平面図です。先ほど見ていた厚生会館の体育館の機能を奥へ持って行って市役所の機能をこちら側とこちら側に分けております。先ほどの再開発ビルの方にも市役所が入っているので、市役所の機能がいくつかに分かれているというふうになっています。このナカドマと言われるところとアリーナが一体になって大手通りという商店街と繋がっています。こちら側が商店街の方ですけれどもナカドマといわれるところです。この奥にアリーナの機能があって一体的に使えるということになります。ちなみに市長室がここになります。この施設ができた次の年の成人式もこちらでやって晴れ着の人たちもここにいます。長岡は雪が降るので5月に成人式をやるのですけれども、屋根がかかっておりますので晴れ着でも雨などにかかわらず皆さんが来られるようになっています。子どもたちもこの場所を使って長岡のまちをどうしようか？というような総合学習をしたりしています。ここに持ってきた時にいいなと思ったのは高校総体のバスケットボール、ここはアルビレックスというプロバス

ケットボールチームのホームになるんですけれど中心市街地の中で高校総体などをやっていたりすると、中でも見られるんですが外ではスクリーンになっていてこの前では普通に街中を歩いていた人たちがワーッという声につられてスクリーンを見ていてこれは決勝戦だったんですけれど盛り上がったりする。今まで高校総体をやっていた場所は長岡市のちょっと郊外にある総合体育館でやっていたんですけれどもこれが街中に来て市民の目に触れるところで活動ができることは良いことだなと思います。

中心市街地にあってもっといいことは酒の陣といって長岡はお酒が有名ですが、市民を交えてたくさんの人に来ていただいく、でも帰りは公共交通で帰れるのでかなり親和性の高いことになっています。街中に市役所が来ましたので駐車場に止められないということで市役所の人たちはほとんどがマイカー通勤だったんですけれども3割くらいに減ってきたという効果もあります。アオーレができて中心市街地に出かけるようになった方ですとか飲食が増えたという方も出てきています。市役所が街中に帰って来るというのは他のところでも事例があるんですけれど、市役所へ来る方より圧倒的にイベントとかプールの利用の方のほうが利用者としては多いということになりますし、先ほどのアリーナやナカドマといわれるところの利用者が8割がたを占めるということもわかってまいりました。これは市役所のところにあるベンチですけれども子どもたちもフラッとここへきて語らったりできたりするわけです。今までのところがアオーレを契機とした再開発ですけれども、中心市街地の一番端に出来上がったのが福祉の拠点ということで再開発ビルができあがりました。

最後ですけれどもこれが駅で、アオーレでここにまちなかキャンパスも入っている。そしてこれが福祉の拠点として新しい再開発ビルができたんですけれども、今真ん中にもう一つ巨大な空き店舗がございまして、ここも大きな再開発を考えています。こちらにあった図書館機能をこちらに寄せて新しくしようということになりそうです。長岡の場合は津と違い、津は津駅の方と津新町の方と2か所に駅があるんですけれども長岡は本丸があったここ一つなんですね。ここがボロボロでしたので今のような形で作り直したということになります。若干行政の取り組みが多かったんですけれども市民もNPOの活動ですけれどまちなかを使ってバル街を仕掛けたり大学生たちと商品開発をしたりして飲食で中心市街地を盛り上げようとそういう活動もしております。官民が一緒になってここをどうやって使うかというのを今考えているということになります。目指すのは子どもたちが笑顔で中心市街地に来てくれるようになればいいなというのが我々のであります。

まとめますと、長岡は駅前が中心市街地でセンターとするとここ一ヶ所です。そこがボロボロになってきましたのでまちなか型公共サービスというものを展開してまいりました。市役所が街中に戻ってきたといわれますが、実は市役所機能が戻ってきているわけでそこにハレの場として先ほどのアリーナとかナカドマのような施設が併設されているというようなところに特徴があります。途中で言いましたが、まちなかキャンパスというのも市民が街中に来るきっかけになっているということです。連鎖型再開発まだまだ続けているんですけれども、課題もございまして今のところ商業面での波及効果が非常に限定的で未だに小売店がどんどん潰れていっております。ですので、アオーレとかいろんなところに来られる人がそこだけしか来られないので何とか回遊性を担保したり、まちなかへの滞在時間を確保するということが今の課題になっております。皆さん長岡をご存知の方凄く多かったんですけれども、是非来て見ていただいて現状を見ていただいてまた次再開発を

やっていくんですけれども良くなっていることを皆さんに見ていただければなと思います。以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

小野寺

ありがとうございました。樋口先生に長岡の事例を説明していただきました。地方都市の中心市街地をアオーレ長岡のように皆が集まってきてハレの場として市民に使われていくといいなということでした。津の街については5人の先生方昨日の午後に津に入ってもらって市役所、大門や松菱さん百五銀行さんなどを見て今朝も寺内町を見てもらって1日程度ですけれども津市のことも見てもらっています。それでは準備ができましたので、次は浅野先生からお願いします。

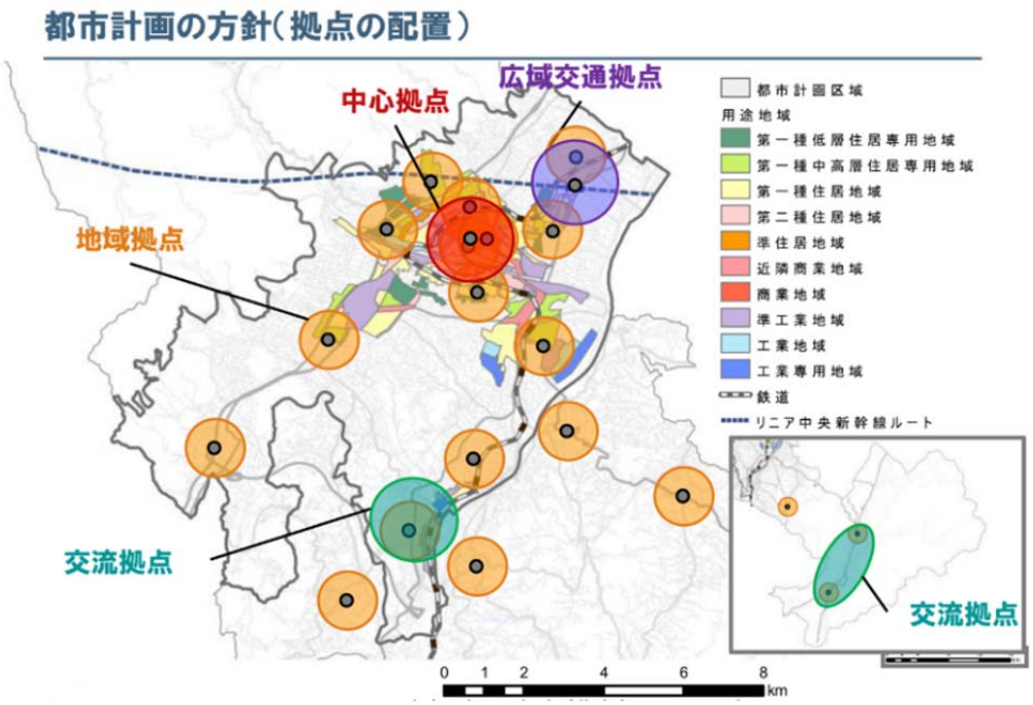
「地方小都市における都市縮小対策と課題
～長野県飯田市の中山間地域の
拠点形成の取り組みから～」

豊橋技術科学大学　浅野 純一郎

浅野

こんにちは。豊橋技術科学大学の浅野です。樋口先生と大学の名前が似ていますけれど姉妹校ということで技術科学大学は2つあります。豊橋の方の大学に勤めております。私のタイトルはそこに書いてあるように飯田市を対象にして中山間地域の拠点形成の話をしますが、それだけ話しても繋がりませんので前半は飯田市の都市計画の紹介をしながらそちらに入っていこうと思います。このような内容で話します。

飯田市ですが、長野県の一番南の飯伊地域というところの中心的な都市です。今、合併していましてこちらが市域になります。ですから、静岡県と岐阜県に接しているということで､人口は10万人を少し超える程度、面積が合併した結果非常に大きなっていますが、昨日話を聞いたら津が711km2ということなので津には負けていますが、津がいかに大きいかということをご存知であればこの数字もいかに大きいかということが分かるかと思います。そして都市の成り立ちは典型的な合併都市ですね。分かりにくいんですけれども、数字が書いてあるところ昭和の大合併から平成の大合併まで常に合併を繰り返してきてできてきた都市です｡一番直近では2005年に南信濃とか上村という南アルプスの部分を併合しまして今の市域になったということです。ですので、この点でも津と似ていますけれども昭和の大合併でも市の形が変わっている点が違うということです。このような背景がありますので、結論的にどういう特徴があるのかといいますとまず最初に市街地が地域のごく一部なんですね。都市計画区域ですら市域の12%にすぎない山間都市であるということで、市域がこれくらいなのに対して都市計画区域はこれくらいしかありません。いろいろと地域の色が塗ってあるのはさらにその中、それ以外は全部山だというような都市です。ですので、小都市としての都市計画の課題と中山間地域のことも考えないといけないということがあります。市街地は斜面なんですね。天竜川の河岸段丘地にできていますので斜面都市であって平地型の都市計画ではないのでこの辺りは



津と違うと思います。ですので、都市計画法で計画を立てるんですけれどもそれがごく一部でしか使えませんから、独自対応でやる必要があるということがあります。住んでいるのは都市計画区域外にも住んでいますからそのような都市において「コンパクト＋ネットワーク」はどう考えたらいいのかということが課題としてあるんです。それから、小都市としての都市計画は何といいますと、中心市街地が寂れていますのでどうやって再生するのか、それから線引き制度というものをやっていませんので低密度での分散型の市街地が広がってしまうのをどう抑制するのか、それからご多分に漏れず空き家が大量発生しておりますのでどうやって対処するのかという問題がございます。それらに加えて中山間地域の課題があって過疎化やコミュニティをどうやって維持するのかそういうところで果たして集約拠点って何なのですか？というのが飯田市の課題であるわけです。市域がこれだけなのに対して都市計画がこれだけ、色がついているところが地域の色、立地適正化計画は地域の中にありますからほとんど役立たないくらい広いというエリアでこういうところの拠点をどうしようかというのが今日の話題です。このような感じですので飯田市は一応都市計画マスタープランというものを作っていますが、このような図で見える化していません。文書で何々地域の旧役所跡である自治振興センターが拠点ですと書いてあるだけなんですね。それを図に落としていくとこういうことになるわけです。どうも飯田市の中心部は中心拠点になっていてそれ以外の合併する前の役所のあった場所が地域拠点だとするとこういうふうになるんですけれども、先ほど申し上げたようにほとんど都市計画区域の外にある。交流拠点は天竜峡という観光地でリニアの駅が新しくできるので広域交通拠点というものが新しくできてこのような絵が認識されて状況なわけです。

このような都市ですが、何か希望してあるのかといいますと一応飯田市は中心市街地再生施策の成功事例として認知されています。まちなか居住型の再開発を一番最初にやったのは飯田市なんですね。それから飯田市まちづくりカンパニーという TMO これが一番最初に成功事例として機能して未だにエリアマネジメントの持続可能的な活

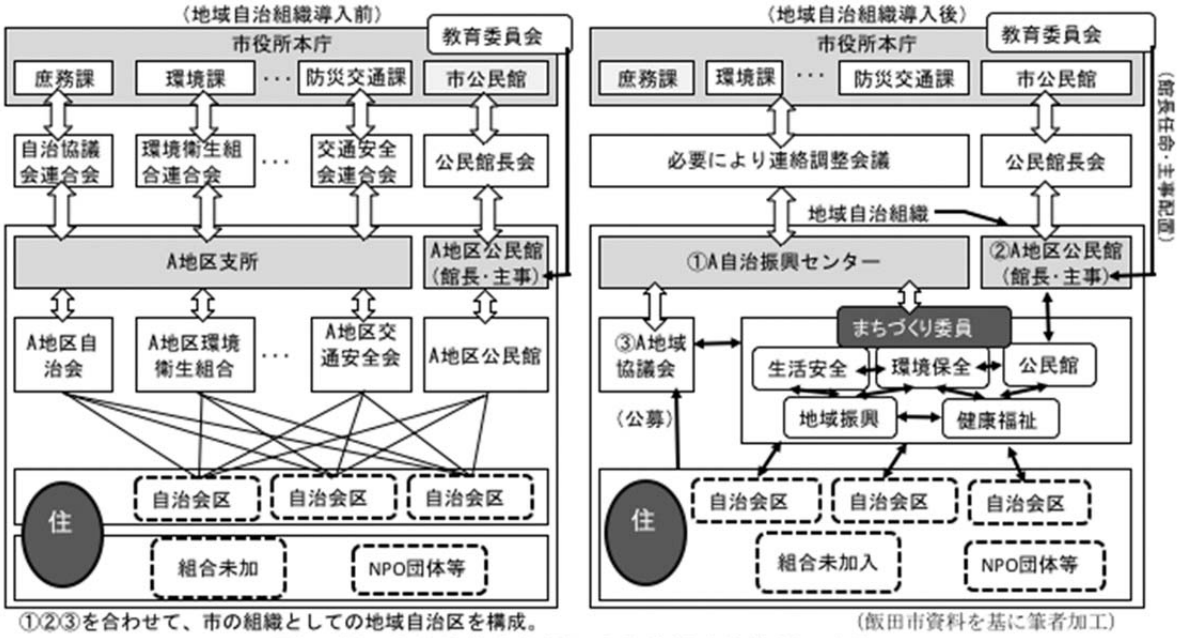


図3　飯田市自治基本条例による地域自治体制の変化

動をしているものがあります。これは非常に大きいポイント。それからリニア中央新幹線の新駅が 2027 年にできますので、他の地方小都市とは違ってひょっとしたら新しい投資が来るかもしれないというものがあります。あまり期待しない方が良いかもしれませんが…。それからもう一つ飯伊地域の中枢都市、人口規模は小さいですけれど、長野県は南部が非常に山深くて北よりも拓けていないので、例えば病院だとか行政機能がもつ拠点先としては非常に強いんです。そういう意味では都市圏での中枢性は人口規模に対しては非常に強い都市であるということが言えます。これも希望であると。それから、もう一つこれからの話の中心になるんですけれども自治地域組織制度というものを入れていて、そもそも飯田市の下伊那地域というのは公民館制度が戦後から非常に活発で住民活動が非常に活発なエリアなんです。ですから今から住民の人をいかにそういうものに目を向けていくかというエンカレッジをしなくてもすでにあるわけです。そういった組織活動とそういった活動を支えていく組織づくりが終わっているということがあります。

何をやったかといいますと、2006 年一番最後の合併が終わった 2005 年のすぐ後に自治基本条例と地域自治区設置条例というものを設定して従前でよくある市のパターン、各自治体に消防だとか交通安全だとか下ろしていくんですけれど、こういう役割を協議会と任意のまちづくり委員会に全部まとめてしまって組織を作ったんですね。こういうものが今飯田市の 20 地区、旧合併町村の役場単位で自治区。地域自治組織というものを作ってこちらが行政側の組織として機能する地域協議会。こちらのまちづくり委員会というのは完全に任意の団体ですが、活動範囲は旧合併町村の区域内で活動しているということでこの中に様々な委員会、住民団体で築かれていてこの活動に対して使途を自由にした交付金というものを入れています。こういうものがもう 10 年くらい機能していてこれをもとに非常に活発な住民活動が行われているということです。職員が地域自治センターの中にいまして昔の役場の建物を使っている例が多いです。構成はこんな感じですが所長というのが役場、市役所の職員なんですけれどもこの人がまちづくり委員会の会長さんこの

方は住民ですがこの人と二人三脚でいろいろ仕掛けるんですね。この仕組みが非常にうまくいっていて特定の地区だけではなくていろんな地区で様々な委員の活動が行われている。

今日はその中で千代というところのことを紹介するんですけれどもソフトパワーとしての活動とは別個に先ほどからお話がある役所の支所とか病院だとか商業機能だとか広域施設という物的なものの集まりとしての拠点ということで言うと下に行けば行くほどものが無いんです。そこにものを考えた集約型の発想の限界があって飯田はそういうものが成り立たないんですね。それでどんなことが起きているのかといいますと、これは千代というところで全域が山間地域、東西が 10km くらいありまして人口が今 1722 人で高齢化率 41%、10km 以上の地区に 12 の組合数があってこの千代集落というのが自治振興センターとかいろいろあって拠点なんだろうというところですけれど、この人口ですら 330 人なのでほとんど分散して住んでいるんですね。しかもこの写真で見ると集まっているように見えるんですけれど現場に行くとここの自治振興センターのグラウンドと学校のあるところでも 100m 以上標高差があるのでそもそも歩いていくような拠点とは違うんですね。集約とか平地で言っている話が通用しない。モビリティの現実としては乏しい公共交通。あるだけましなんですけれども先ほどの千代集落でもかろうじて 1 日数本の市民バスというのがあります。それしかないので年少者を除く住民の 8 割は自家用車を運転主に軽トラですね。80 歳 90 歳でも運転しているという現実があって運転できるものはするのが当たり前で新規居住住民Ｕターンとか I ターンとかよく言いますけれども、努力していないわけではないですが普通のことはやっているんだけれども実際に来ないという現実があります。あっても数年に 1 軒か 2 軒なんですね。しかしながら活動は活発にやっているので交流人口とか関係人口は確実に増大している。具体的に千代でやっている例はまちづくり委員会という先ほどの任意組織が社会福祉法人の会を自主的に運営しています。二つの保育園を市より移管されて経営している。そしてデイサービスでは指定管理を受けていて黒字も出している。それから、よこね田んぼという棚田百選に選ばれた田んぼがあるんですけれど、そこで体験教育旅行など年間 300 余名が体験する実績を上げている。オーナー制度も去年から始めたようです。棚田の話しはよく聞くんですけれどなかなか成功しているところがないんですね。これはうまくやっているケースだと思います。それから、グリーンツーリズムというものをやっていてワーキングホリデーや修学旅行生の農家民泊を 20 年以上やっていて、毎年これくらいの実績がある。これは去年、民泊の太田さんというところへ行きましてお話うかがいましたけれど、今まで来られた方との関係が続いているわけですね。

こういったところを見ながら私が考えたところは中山間地域ではハコよりもコトのほうが重要であって、組織とか体制とか産業、人材そういったところに注目する必要があってコトがあるから将来の持続可能性を考えることができるんじゃないか。これをやれば確実に持続可能だとは言えないんだけれどもこれがないと始まらない。じゃあ何故やるかということなんですが、外から見た感想としてはやっていく生き甲斐ですよね。生活の充実度を確実に上げていくということが言えてここに非常に強い価値感があるような気がしました。ハコが無意味と否定しているわけではないのですが、やればそこの場所に行く移動時間とか手間の節約にはなるし集まることによって交流機会が増大するので貢献はできると、しかし順番としてはハコの整備は先じゃないと思うんですよ。コトのほうが先だろうということが重要である。ではなぜコトは起き

るのか？という話ですけれど飯田の場合は地域的な話、歴史ですね。それと住民意識があります。そして場所を選んではダメなんですよ。物的な拠点の場所とは関係ないのでどこでもいいから起こるという地盤とかそういうものが大事。そして自由なモビリティですね。何か交通で制約されてということがあり得ないのでやはり、ここでは80歳でも車に乗っているということもあるんですけれど、そういういうものに支えられて起こっているんだろうということです。マスタープランでは自治振興センターが拠点に位置付けられているんですが解釈すれば物的な意味での拠点ではなくて、コトが起こる象徴的な場所としての拠点ということでみんな納得しているんじゃないかと思うんですね。こういうコトとしての拠点はあり得るだろうと、ただし公共交通で拠点をつないでいるという教科書的なモデルができるのか？というとかなり怪しいなという感じが、例えばディマンドバス等いろいろ言っているんですけれど希望して手を挙げた人が絶対に使えるわけではないので。飯田市は急傾斜地や谷間に形成された都市なので災害リスクをいろいろ考えると絵が描けなくなってしまうというところがあります。それから話を持って行く時に住民が自分たちでやっているという自負が非常に強いので、そういう人たちに集約化とか誘導しますという言葉は絶対に禁句です。アレルギーが強すぎます。そんなことは言われなくてもこちらでやりますよという人たちなのでそういうことも考える必要があると思います。それから立地適正化計画だけでは不十分ということで先ほどお話したような条件ですから、苦しいのは目に見えているんですね。

外でやる事業では小さな拠点事業というものがあるんですけれど他にないという状況。英国などはPALISH PLANNINGという制度があって絵が描けたりするんですがそういうものもない。飯田の場合は地域拠点の中味がまだ未整理で今まだ立地適正化計画の議論をしているんですけれど、先ほど申し上げたように中心拠点があってその下は全部フラットで地域拠点しかない。実は街の中の地域拠点はそんな部分の地域拠点と違うはずですけれどそういうものも整理されていませんから、ちょっとそういうことは考える必要がありますけれども、そういうはいうものの飯田は地盤がありますので、そういうことで新しい風というか何かを示せるんじゃないかというふうに私は飯田市にかかわって結構になりますけれどそう感じている次第です。以上です。

小野寺

ありがとうございました。地方都市といってもいろいろあるんですが、中山間地ということで津市も農村集落の部分は参考になると思います。津市は都市計画区域を持っていて線引きもして津駅もあってという感じですが、ちょっと出ると農村地域ですのでそちらにも目を向けながら地域づくりをしていかないといけないなと改めて感じました。次は松浦先生にお願いしたいと思います

「歴史性を活かした広域拠点と市民主体の地区拠点」

千葉大学　松浦 健治郎

松浦

松浦です。どうぞよろしくお願い致します。私は今千葉大にいますけれども2年半くらい前までは三重大学に15年くらいいましたので、津のことはそれなりにわかっているつもりです。それで、今日は小野寺先生から歴史性を活かした広域拠点と市民主体の地区拠点ということで話してくださいということですので、その二つについて簡単にお話ししようと思います。

最初にどういうことを話すかということですが、歴史を活かした広域拠点ということで、津でいったらお城公園の辺りがいろんな公共施設が集積していて広域拠点になる可能性があるのではないかと津にいながら思っていました。津は天災にあっていますけれど割と城下町の面影は残っているエリアでもありますから、そういう意味で都市の歴史性を活かしながら広域拠点をどう作っていったらいいのかということが重要になってくるのではないかなと思っています。そういうような事例として去年この小委員会で行きました甲府市などの事例を紹介したいと思います。もう一つは市民主体の地区拠点ということで、これは先ほどの浅野先生のお話とちょっと被るんですけれども広域合併、津も広域合併都市ですが、合併前の旧市町村の役場が津市が合併前に結構建て替えられてハコ物は立派なものがあるので、そこを地区拠点として市民主体で運営していくことがこれから大事になっていく。津もマスタープランではそういうことを位置づけていると思います。そういう時に先ほどの浅野先生の話しにもあったように地区拠点を市民主体で運営できるような仕組みを津でも考えればならないのではないか。同じ三重の名張の事例を名張のほうが飯田よりもう少し早めに地域予算の制度を取り入れてやられているとことなんですがそこの話をお話ししようと思います。よろしくお願いします。

まず最初に広域拠点の話しで私は学生の頃から官庁街の研究をやっていまして城下町、お城付近が近代、明治以降写真にあるように県庁とか市役所とかそういったものがお城付近に立地してそこで政治の拠点を作っていくわけです。全国的にこういったものが生まれていまして、例えばこれは吉田初三郎さんという昭和の絵師の方が描かれた立体的な鳥瞰図なんですけれど、官庁街を取り込んでみると内丸通というところ沿いに官庁街ができて近代の拠点ができている。お城の周りの堀なども埋め立てて、お城の周りが閉鎖的な空間だったのを周りに開こうというので堀を畳んで、道も綺麗に抜けるような道を作ってそこの周りを官庁街、学校なども含めて公共的な施設を集約させて広域的な拠点を作っていたということですよね。それがいろんなところで生まれて、大体お城の付近ですからお城の堀とか山と上手く対応させながら近代の官庁街はできていったという歴史がある。そういったものをこれからどう活かしていくのか問われている。もう一つ、歴史性の話しで最近のトレンドとしてお城付近の堀などで、先ほどの話しでは堀を埋め立てて周りに開くという話をしましたけれど、最近のトレンドはお城付近を昔風に戻していくことがいろんなところで行われて堀に着目すると堀を復元していくようなところが今増えているんです。そしてそこのまちのアイデンティティの中心としてお城付近を位置づけるというようなそんなことがいろんなところで行われています。例えばこれは静岡県の静岡市ですけれど静岡市も野球場とかテニスコートとかそういったものが本丸の中に入っていたりしてそれをこういう形で復元して内堀などを復元しながら昔の状態へ戻していくというようなことを段階的にやっているわけです。あとは、これは野嶋先生も関わっていらっしゃったかと思いますけれど、福井などの場合ですとここに市役所がありまして、こちらの堀を復元してここは公園ですけれど公園のところにも

堀があったのですがそこに水を入れてしまうと公園として機能しないので、そこには堀があったという面影を残すためにサンクガーデンとか舗装でお堀の面影を残していくそういった整備が計画されていて、歴史を視覚化していくようなことをやっているんですね。昔の都市の面影というか歴史を視覚化できるような取り組みがいろんなところで行われてきている。金沢なども外堀のところで堀が昔はここまであったんだけれど、だんだん狭くなっていったというのを石積みで表現していてそれが表示されていたりしますし、こちらは山形の鶴岡というところで百間堀という沼地のようなところで、そこで大学施設とか博物館とかを作るときに沼地だったところを百間堀といって昔の堀の形ではないんですがお堀があったところに水を張っているそういう整備をしている事例もあります。それから先ほどの公共施設の集積というところでいうとシビックコアという制度、結構古いですが 10 数年前にできていろんなところで実現化しています。

その中で歴史を活かした公共拠点の施設として甲府の事例があります。いろんなところを私も見てきたんですけれどなかなか歴史を活かしてシビックコアを作っているという事例がなくて甲府はその中で非常に開発と歴史的な保全の二つが上手く両立して進んでいる事例として非常にいいなというふうに思いながら見ています。甲府の場合は駅の南側にお城公園があるんですけれども北側の部分にシビックコアの地区整備をかけて合同庁舎を中心として公的な施設を集積化していく整備をしています。一方で東側のエリアには歴史公園を復元したりとか、あるいは駅前広場を整備するときに昔の石垣を復元したりですとか、歴史的な建物である藤村記念館というものを駅前の広場に移築するとか歴史的な資源を視覚化するような取り組みを一緒にやっているんですね。これが甲府の先ほどの吉田初三郎さんが描いた昭和初期の頃の鳥瞰図ですけれどもこのお城公園があってその大路通沿いに藤村紫朗さんという県令中心にして官庁街がある。そして今、駅のこの辺りがシ

歴史性を活かした広域拠点～甲府市シビックコア地区

図１：甲府市のシビックコア地区[1]

写真１：駅前広場に復元された石垣

復元された歴史公園

写真２：駅前に移築された藤村記念館

ビックコアの整備をしていて駅の北側、この辺りを歴史公園としてお城公園がこちらに拡張しているというようなことを同時にやっているというようなことです。津もこちらは同じ初三郎が描いた津の中心部の鳥瞰図ですけれども、お城の周りに師範学校これが多分三重大学になるんだろうと思いますけれど、それから郵便局、市役所とか公的な施設が集積して広域的な拠点を作っていったということですよね。この辺り内堀がなくなっていますけれど、内堀も一部は今でも残っています。これが現在の空中写真です。現在は市役所がありますしリージョンプラザ、図書館、警察署、裁判所など公的な施設が集積している。基本的な構成は変わっていないということです。

こちらは、私が三重大にきてすぐの時に早稲田の佐藤滋先生などと一緒に図説城下町都市というものをまとめましてその中でちょうど三重大に来るということだったので、津のところは私がやりますということで津の城下町についていろいろ書いたことがあるんですけれど、それでいろいろ調べましたけれど津は先ほどの長岡と同じように戦災にあっていまして、戦災復興の道路計画が青色の部分でその前の城下町の時代の部分がグレーで重ね合わせて見るとほとんど道は違っていて大門の商店街の辺り一部残っていたりもするんですが基本的な街路パターンはかなり変わってきてしまっている。それに対してお城の周りは先ほどの話しでもそうですが残っている。城下町としての面影が建物、歴史的な街並みが歩いているとなかなかないんだけれど、お城の周りを歩いていると堀があったりしますので城下町の面影が少し残っているということですね。そういうようなことがあって、これも三重大にいた時に今から10年くらい前でしょうか大学の3年生の製図の課題で私が出題担当だったのでお城公園地区で歴史的な資源を活かしながら公共施設再編のプランを考えろという出題をして学生と一緒に取り組んで、確かセンターパレスのところで展示会をして、それから市民の方を招いて発表会をして市民の方に意見を聞いたりそういうようなことをしたことがあります。その中でも学生が提案した内容で課題がそういう内容だったのであれですが、エリア全体を一つのシビックセンターとして見立てていろんな公共的な空間。広場空間や交流空間とか南側の堀も一部復元した

＜地域予算の受け皿＞

・地域公民館（概ね小学校区）単位の14地域に設けられた地域づくり委員会（現在は15地域）
・面積、人口はバラバラ
↑なぜか？
・旧町村の単位等により各地域の境界が決まった歴史があるため
・名張市全体で172の基礎的コミュニティ（区・自治会）があり、その集合体（連合自治会的）として地域づくり委員会が存在している。
・拠点は公民館・市民センター等

	最大	最小
面積	国津地区（24.8m²）	すずらん台地区（0.9m²）
人口	桔梗が丘地区（14,102人）	国津地区（885人）

人口は名張市(2008.3)「名張市の人口」より

図：14地域の位置と地域特性（2008年）

りしながら外部空間を繋がらせたりだとか施設間の繋がりなどもいろいろと考えて提案をしてくれました。こういうようなことをこれは学生の課題なんですけれども市民の思いがこういうような形になっていったらいいのかなというふうに思っていますというのが広域拠点の話しです。

それから次は市民主体の地区拠点ということで名張の場合は小学校区単位に地区拠点を設定して、設定するだけじゃなくてちゃんと財源を用意して地域予算制度と言いますけれど、小学校区単位にお金をおろすと、それまでバラバラに配分されていたいろんな補助金を統合して一括して出してあげるそれで地域の方でいろんなことを決めていいですよという仕組みでやられています。たぶん飯田とほとんど同じだろうと思いますけれど、いろんなエリアがあって名張の場合、名張地域というところが昔の城下町なんですけれど､それ以外は住宅団地。名張の場合は大阪のベッドタウンという特性がありますから住宅団地が結構多くあるんですね。ですからそういうような緑色のエリアが多い。あるいは国津地域といって完全に農村部、飯田の事例に近いようなエリアもあって 14 地域に地域予算を作って、地域づくり委員会という組織を立ち上げてその中心が公民館とかコミュニティセンターとか市民センターですね。そういうところを地区の拠点として位置づけて市の方もここに入っていただくというようなことで進めています。それぞれの地域組織がビジョンを策定して実際に予算の配分を行う。そして行政スタッフとの関係でいうと行政スタッフの方が地域担当職員という担当制度だったんですが､それが 2013 年からそれを廃止して専任スタッフを 3 名配置してその 3 名の方が 5 地区を担当して橋渡しをされているというところです。役員の属性は地域の役職者の方が多いです。あるいはやっている内容を見るとそれまで自治会の中でやっていたこと、例えば敬老会の行事ですとか実際今までやっていたことを継続するようなところもあれば、ここではまちづくり事業体と言っていますが地域サービスですね。防犯パトロールとか環境美化とか公園を整備するとか、地域を実際良くしていくような活動をされているところ意欲的にされているところで地域でかなり差は出てきているんですが名張ではそれはそれで良しとしていて、例えば郊外の住宅団地型のすずらん台では自分たちでできないことを助け合いながらということでライフサポートクラブという仕組みを作って庭の剪定とか日曜大工とか送迎サービスもコミュニティバスを自分たちで用意してボランティアで病院とか駅とかまで送迎してくれるそういったサービスを自分たちでやっている。ですので、そういうようなただの地区拠点として位置付けるだけでなくてちゃんと仕組みを用意してあげれば市民主体でそういった地区運営がされていくというのが名張の事例でいえるのではないかと考えています。以上です。ありがとうございました。

小野寺

ありがとうございました。15 分間で 2 つのテーマをお話しいただきました。津には津城を中心とした拠点があること、名張ではいまだに家がつくられているような郊外の住宅団地でありながら高齢化などでどうやって維持するのかというのが随分前から最大の課題になっていて、それを住民自治でどうしていくか。私のゼミ生でもすずらん台に住んでいる学生がいて今日は喜んで聞いているんじゃないかと思うんですけれど、自分の住むまちがこうやって紹介されて先進的な事例なんだと思ってもらえればと思います。それでは最後になります。埼玉大学の内田先生お願いします。

「市民協働・市民主体の多様な拠点像」

埼玉大学　内田 奈芳美

内田

みなさんこんにちは。埼玉大学から参りました。内田と申します。皆さんだいぶお疲れかと思いますが私で最後ですので、私は大きな話というよりは拠点というものに集中してお話をしたいと思います。

拠点って一体何だろうということの中でいろんな拠点像、実際これは拠点と言えるのか？というようなことのお話をしたいと思いますのでもうちょっと身近な話かなというふうには考えております。

もともと私は石川県の金沢市に居りまして、今埼玉に居りますのでその二つの事例を引き合いに出して考えたいのですが、そもそもの拠点としての話として拠点って結構便利な日本語で何でも拠点と言ってしまえば拠点なのかという、でも本当に拠点として役割を果たしているのかという疑問があるんですね。これは 1980 年に出版された「現代人の生活拠点」という本があったんですけれども、そのなかでちょうど拠点というものは何なのかということを論じていて、その時に言われていたのが人口増加してコミュニティの希薄化、人口の都市部への流入ということが相まって拠点というものが生活の中で大事なのか？何が起きているかといいますと生活の中の役割や機能を家庭や住居、つまり生存の拠点から外在化させるものが拠点であるというようなことを言ったわけです。それから希薄になったコミュニティ共同体ですけれども、こういったものの補完機能をもつことというのが 80 年ちょうどにおける拠点の役割だというようなことを言っていまして同じことを言っているわけですけれどもこれは今と同じ議論として繋がっていくかなというふうに思います。ですので、拠点とは何だということで考えた時に生活機能の外在化とコミュニティの機能補完がキーワードとしてあげられるのではないかと思って議論を進めていきました。これは 1980 年でしたが、現在の拠点とは何かを考えるときのヒントとしてここ 5 年くらいの新聞記事を調べたんですけれども線が太いのがよく出てくる言葉です。皆さんピンとくるとか聞いたことあるなと思うと思うんですけれど、何でも交流拠点だと言ったり、何でも観光拠点、発信拠点だと、線が太くぶつかっているのはくっついて使われている言葉なんですね。だから文化拠点といった時には発信拠点だという表現が多かったんです。その他は地域拠点であれば介護とか先ほどの生活の外在化というキーワードがありましたけれどそうしたことを拠点として役割を果たしているというようなことを新聞記事で言っている。ただ、皆さんも私も疑問なんですが、こういったものが本当に拠点として機能しているのか？ということなんですよね。今からこの拠点が始まりますということを言って、それが何年か経った時に本当にその役割、期待されたことを果たしているのかどうかかなり疑問だなということがあります。

私、拠点という言葉は便利な日本語だという話をしたんですけれども、再整理してみると拠点って何だと。しばらく禅問答みたいになって申し訳ないんですけれども、いろんな拠点の意味があったんですね。これは私の分類ですけれども、立地適正化計画の話しは皆さんに既にして頂いたのです

ありそうな「拠点」

人工的発生拠点

- 表向き拠点
- 位置づけは拠点
- 気遣い拠点

自然発生拠点

- なっちゃった/できちゃった拠点
- いつの間にか拠点

目的化した拠点

- 行きたくなる（行かざるをえない拠点）

拠点性

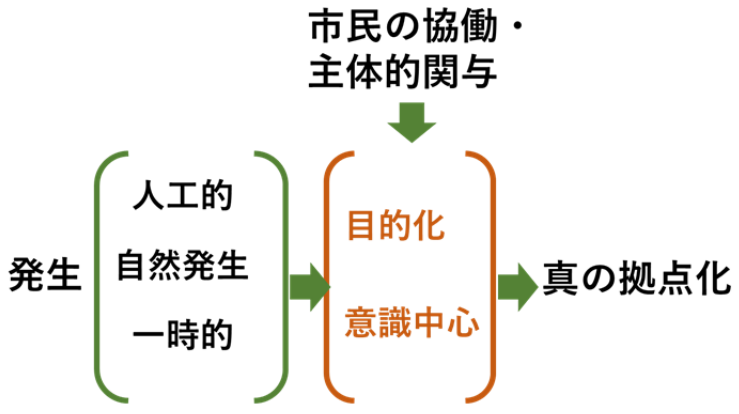
大

「**拠点**」としての役割を果たすには
→発生の状況はともあれ、
目的化し、**意識の中心**となること

が、その中でのエリアとしての拠点としての言い方、Zone ですね。それから Hub 駅のような交通の拠点としての拠点。それから活動の足場としての拠点 Base。それから皆さんが一番拠点としてイメージするのはこの Center としているものが一番近いんだと思うんですけれどもコミュニティの拠点ですとか、Position になるとかなり精神的なものになると思うんですけれど、結構拠点といったところで別に英語に直さなくてもいいんですけれど、例えば英語に直してみるとこれくらい幅があるんだということですね。それで、拠点って結局何だろうということを考えたいわけです。拠点と言われたときにありそうな拠点というものがいくつかあるんですけれど例えば人工的に発生したような拠点、どういうものかというと気を遣って拠点にしたとか、表向きは拠点だとか、位置づけだけ拠点というものが結構多かったりするわけです。例えば、いろんな都合でこの商店街を拠点に入れようですとかいう話が出てもその商店街はシャッター街だったりするわけです。一方で自然発生的な拠点もいくつかあるわけです。いつの間にかなっちゃった、できちゃった。そしてみんながいつの間にか行っている。一番拠点として大きいのはどうしても行きたくなる。行かざるをえない拠点だろうなと思ったわけです。拠点性を大きくしていくということが拠点と言うものの位置づけと私が疑問で思っている本当にそれが拠点なのかというもののギャップを埋めていく一つの大きな重要なポイントなんだろうなというふうに思っていまして、そうするとここで禅問答が終わるわけですけれども拠点としての役割を果たすには発生の状況としては人工的だろうと自然発生的だろうとどちらでもいいのでともかく行くという目的化して、皆さんの意識の中心としてあそこは拠点だと思ってもらうことこの二つが大事なんじゃないかというところに行きついたわけです。

そのあと事例の話になるんですけれど、じゃあどういう拠点というのが実際の社会に存在しているのかということをどこの地域でもいいんですけれども、私はたまたま金沢市に詳しいものですから金沢市の事例を少し引き合いに出してお話ししたいと思います。

いくつか事例があるんですけれども、ひとつこれは金沢学生のまち市民交流館というところで、もともと豪農の家だったところでずっと空き家になっていたところを市が買い取ってリノベーションして学生や NPO であればタダで使えるコミュニティセンターみたいなところになっているわけですね。ここは飲食禁止でまわりが飲み屋街ですけれども、飲食はそちらでやってくれということになっているんです。運営会議と協働して運営しているわけなんですけれどもこれだと例えば学生に特化するという目的化しているんです。なおかつ周辺の波及効果を生み出すという精神的な中心になるというこのふたつが挙げられるだろうということでこれは拠点なんだろうなということが言えるかなと思います。二つ目はこ



#拠点方程式

れも金沢市でこれもリノベーションのものでして、もともとの紡績工場をリノベーションして市民が参加して運営しながらほぼ24時間使える。毎日開放していて、音もいくらでも鳴らしてもいいですし芸術的な活動ならば何をやってもいい。そういう場所になっています。ここも相当使われているんですけれどもここも先ほどの評価軸でいうと運営を任せている時点で自分の場所だという思いがあるわけですね。意識中心、精神中心さがそして自由な活用ができることということの目的化がされている。この二つが当てはまると思います。三つ目は有名な例ですけれども、金沢21世紀美術館というものがあるんですが、もちろん建築的に美しいというものもあるんですけれどもこれができた後10年くらい例えば伝統工芸を21世紀美術館の中に新しい工芸のあり方という展示をした上で、そこから新しい工芸の伝統がつながっていくというようなことがあったわけです。それでアート関連の活動が連関して、波及していくことアート関連の活動として目的化、それが波及していくことで意識、精神的中心になったというようなことが建築的な美しさ以上に拠点化していったということかと思います。

今まではハードとしての整備でもうひとつ私がここで皆さんに提案したいというか論点を提示したいのは、先ほど浅野先生がコトを起こすというお話をされていたんですけれども、コトを起こしてから拠点を作ったほうがいいんではないか？ということも考えられるわけです。それを今私は一生懸命やっていまして、それが社会実験による時限的な空間の拠点化というふうに呼びますけれども、これは公共空間の利活用というものを最近凄くやっているんですが、コトを起こしてしまえばそこが拠点というか目的化されて先に中心性を作ってしまおう。その後何かをすればいいのではないかということを考えたわけです。一時的に拠点性を空間に持たせるということですけれどもハードを整備しない利活用によって市民が共存しやすいということがあるんです。なおかつ自分がやって拠点としての場所を意識しやすいということがあります。その結果目的化して一時的にでも意識の中心となるということが先にコトが起こせるということを考えているわけです。具体的にはどういうものかというというお話をしますと、ここからは埼玉県のお話ですが、皆さん埼玉県だと東京圏だからいろいろ心配しなくてもいいだろうと思われるかもしれませんが、近年埼玉県も二つの市以外は人口減少が起きているわけですね。地方都市と同じような問題を抱えているわけですけれども、これは「クレヨンしんちゃん」で有名な春日部市なんですが、今私は埼玉県の県内の市町村の職員の方と一緒に公共空間の利活用ということでいろんな仕掛けをしていまして、春日部市も人口が減っていくという話になりまして中心部も賑わいがなかなか難しい状況なんですね。これは藤通りといって藤棚がある駅からの中心通りですけれども、ここも通行だけなんですね。周りは郊外型のショッピング店舗があるんです。このおしゃピクというのは何かといいますと、お

しゃれピクニックという言葉を女子大生が言って街路を意識中心にしたいというようなことで公共空間の利活用の一環として道路占有を取って街路でおしゃれピクニックをしてみるそのことによってまず街路が通行の役割だけだったものを意識中心にしてみて今までここを目的化した人はいないんですけれども駅に行くためだけの道ではなく目的化しようというようなことをやりました。

二つ目の事例ですけれども、これは埼玉県所沢市の団地内の公園になりまして、津もいくつかニュータウンがあるとお伺いしておりますけれども、これもニュータウンでして70年代に建設されて今、かなり空き家、空き地で不動産価格が下がってきているという状況が起きてきています。中に中央公園というものがあるんですけれど、全然使っていないんですよ。公園というものがせっかくあるのに人が住んでいるんだからそこを目的化して拠点にしようということをやったわけです。この写真だけですとキッチンカーがいていろいろ飾りつけしているだけのように見えるんですけれどもここで近隣に住んでいる主婦の方々で自分のものを何かビジネスとして作ったものを売りたいとか、小さなビジネスを始めたい今3万円ビジネスといって月に3万円に儲けられれば地域でいろいろやっていけるだろうというようなプラスアルファで稼ぎたいという動きが結構出てきているんですけれども、今やっているのは当日気温が2度くらいだったんですけれども地域のニュータウンに住んでいる子育て世代のお母さんが自分たちのものをマルシェとかでどう売っていこうかというものの仕掛けをワークショップとしてやっていたものです。実は今日もこれが発展しまして今日の予定でしたが雨なので明日になったようですけれども、椿峰というところなんですけれどもマルシェをやっています。先にモノをたててそこをマルシェですとか主婦の人が活用できる場所にするというのではなくて先にコトを起こしてここから考えて行けばいいんだと思うんですよね。こういったことをやっています。

最後ですけれども、これは大都市部になってしまいますが、埼玉県に大宮駅というところがあります。新幹線も通っているようなところですが、そこでアーバンデザインセンターということをやっているんですがこれは都市計画道路の拡幅部分の未だ道路になっていない道路予定地というものが日本全国いろんなところにありまして、パイプで囲われているんですね。道路にはなっていないんだけれども空いている土地というところを目的化しようというようなことで去年やったのが大宮ストリートテラスというもので道路予定地を目的化してこの後都市計画道路が歩道が広がってただ通行するだけじゃなくてその道路をどういうふうにうまく使っていって拠点化というか皆さんが楽しんでいけるかそのことによってエリアが拠点化していくというようなことを目的としてやったものです。実は今日はこちらに来ているのであれなんですがちょうどいま第2弾をやっていましてフェイスブックなどで検索してもらえればいいんですが、今年も道路予定地のところで同じようなことを今ちょうどやっています。

つまりコトを先に起こすということは浅野先生の話しと同じでそうだなと思って聞いていました。それで、そんなに単純ではないんですけれど最後に拠点方程式ということをお話して終わりたいと思います。発生は人工的だろうと自然発生的であろうと一時的であろうと何でもいい。とにかく発生してコトを起こすというようなことをやった上で市民の協働、主体的関与というものを取り組みながら目的化もしくは精神中心、意識中心にしていくことで表向きの拠点というものではなく真の拠点というものが生まれていくのではないかというようなものが私のプレゼンの中での皆さんへの問

題提起だということです。ありがとうございました。

小野寺

大宮の事例などをお話しいただきました。今日は都市構造的な話から拠点の話までちょうど1時間半くらい5人の先生にお話しいただきました。今日は皆さんのお手元に質問票というものがあると思うんですけれど、ここに誰々先生へということで今日は本当に15分くらいで概略を説明してもらったので、気になったり分からなかったり、もうちょっと聞きたいというところなどを匿名でも構いませんので質問してもらうと後半、回答しながら第2部を進めたいと思っていますのでよろしくお願いします。

*********　休憩　*********

第2部　パネルディスカッション

小野寺

これからは皆さんから質問があったもので個人名が書かれているものはそれぞれの先生にお渡ししていますので、準備できた先生から答えていただければと思います。

野嶋

ご質問いただきありがとうございます。質問はオックスフォードは計画的にコンパクトシティとして造られたものでしょうか？それとも自然と今の都市構造になったのでしょうか？自然となったのであればその要因は何でしょうか？という質問です。お答えするとオックスフォードは両方なんです。結局先ほどのプランでも緑の何も建ててはいけないところというのは湿地帯なんです。川の側だったりします。日本だと川の側だと結構家が建ってしまう。だけれども向こうは建てないという強い信念があって、ずっと建てなかったんですね。1960年くらいに建ててはいけないところに絶対法律的にも建ててはいけないということで線を引っ張ったんです。それは日本でいうと線引きということになるんだと思います。ですので、両方なんです。ただ、日本の場合は緑のところも昔から建てられてしまうし、その後の線引き制度は厳しい規制ですが、人口10万人以下のまちは線引きがないので自由に建てられてしまったということがあります。

小野寺

質問された方、よろしいでしょうか？続いて樋口先生お願いします。

樋口

ご質問ありがとうございました。二ついただいています。ひとつ今の長岡駅はいつ

できたものですか？というようなもの。今の長岡駅では新幹線が通った時にできたものなので昭和 55 年にできたものが今の駅です。もしかすると、お城が無くなって駅ができたのはいつでしょうか？というような意味かもしれません。そうしますと明治 31 年に長岡駅ができたようです。戦災復興の時にもう 1 回焼けておりましてその後、今の駅の前になったのだろうと思います。次のご質問は私が最後に言いました長岡の波及効果というのは限定的だということで回遊性はどうやったらできるのでしょうか？というご質問です。これは先ほども浅野先生や内田先生からお話がありましたようにコトというか目的がなかなかないので中心市街地なんて歩こうという気にならないというが現状です。今新しい再開発ビルができるんですが、そこは図書館機能や広場機能を持たせようと計画されています。ですからいろんなところにいろんな目的を中心市街地の中に埋め込んでいくことで目的化できるのかなというふうに思っております。もう一つ駐車場は 30 分 100 円とか 30 分無料とかの設定です。そうすると 30 分で帰れというような気分になりますので、もうちょっとゆったり利用できるような料金設定も考えないといけないなと今話し合っております。簡単ですが以上です。

小野寺

ありがとうございました。では浅野先生お願いします。

浅野

私のほうも二つで一つ目は公共施設では郊外から都市部へ集約され整備されたものは（郊外にあった公園等）何に整備されているのかという質問です。例えば公園等ということでいうと集約される事例がどれくらいあるのかわかりませんが、機能的に集約されたものだというとするとそのもとの公園は管理をその地区の住民に委ねるというような形で残される例が多いのではないかと想像します。

それからそれ以外の施設で統廃合されて残された部分の方はそういう調査もちょっとやったんですけれど後利用がなかなか決まっていない事例が多いというのが現状でなかなか動いていないのが現状ではないかと思います。それからもう一つは鳥羽市の職員の方からですが、本市はリアス式海岸と離島があり小規模集落も存在しています。また過疎・辺地地域に指定され町内会、自治会存続が難しい状況が予想されます。一方、総務省が 7 月に公表した「自治体戦略 2040 構想研究会」の報告によると、公共施設等総合管理計画を自治体に作らせ、集約化やコンパクトシティを推進しようとしています。将来のことを考えるとそういう国の方針というのは理解できますけれど、行政による強引な集約化や誘導は、地域の理解が得られにくい現状において、小規模自治体の集約化はどのように進むべきでしょうか？どうなるのだろうかと思って私も飯田を調べてみたんですが飯田は要するに昔の地域振興センターがあった場所に拠点を置いてということなんですが、それ以上の集落まで目配せしてやっているわけではなくてあの単位が限界なんです。その中で住民の活動の中に活動支援を分配することによってコトをそっちにするような活動をし

ているということだと思いますので、あまり将来的に集約されて住めなくなるとかいうニュアンスをいうような方向ではなくてもう少しポジティブにやっていったらいいのではないかとうのが飯田の話しだと思うんです。

松浦

私はひとつ質問を頂いておりまして、人口が少ないエリアで拠点の場所になりえる旧庁舎、旧学校が公共施設開発等で集約されたりしていますが、その地域の精神的中心の跡地の利活用はどういう形がありますでしょうか。良い事例があれば教えていただければと思います。まちなかのそれまでの拠点が変わるというような話はこの小委員会でも、皆さん一緒にいろんな事例を集めています。それで、例えば旧庁舎の話しでいうと山形の山形県庁舎というものがあるんですけれどもあそこは県庁を移転して建物はかなり立派な建物がありまして、アイストップとして象徴的な建物でしたので、それは残したいという市民の運動がありましてそれを残して確か博物館として残していたと思います。学校についてはこの小員会でもいろいろ事例を集めて確か野嶋先生などがいろいろ集められていらっしゃったと思いますけれど、例えば小学校の跡地を福祉的な施設に利用したりとかあるいは千葉の事例でいうと小学校へ千葉大が入って市民カレッジのような形で市民がいろいろ勉強できるような場に変えていくというような事例が出てきています。以上です。

小野寺

ありがとうございます。それでは内田先生お願いします。

内田

私は樋口先生に対しても質問のあった、波及効果って何だというお話で質問いただいたんですけれども、拠点はいろいろありますのでさっきから割と気軽に波及効果というお話をしたんですが、金沢でいうと21世紀美術館が一番わかりやすい話で、生活の中でというのでは見えにくいかもわからないのですがさっき申し上げたようにギャラリーがいっぱい増えたりですとか、アートのNPOができたりですとか私も金沢のまちづくりをやっていますけれどもそこと21世紀美術館と共同していろいろまちづくりをやったりだとかということが生まれてきたんですがここで結構大事なのが21世紀美術館ができた時にもあったんですけれどハコを作るプログラムを作るというのはあまり効果的ではなくてプログラムを徹底的に作ってそこからハコを作るということが大事だったという話をしていたんですね。なおかつ今何で私が拠点性があって波及効果があるといったのはその時、前の館長さんですけれども21世紀美術館の館長さんは例えば工芸を盛り上げようという仕掛けをやったりとか、我々のまちづくりNPOと一緒にいろいろなイベントとかトークショーをやってもらって人々の意識を高めようとしてくれたというのがありまして結局言ってしまうと身も蓋もないんですが、誰がそこにいるかというのが大事だという話になってしまいまして誰がいるかということともう一つは単体でのコストパフォーマンスを過度に請求しすぎると本質を見失うというのがあったんですね。21世紀美術館の

話ばかりになりますけれども今は新幹線もできて凄くお客さんも来るようになったので単体でも成り立っているのだと思いますけれど、どうしても単体での施設としてコストパフォーマンスを見るとなると拠点というのは無駄なのではないという議論も出てきてしまうかもしれない。波及効果って無理に経済効果を図ろうというのもそれもちょっと難しい話なんですよね。単体でみない方が良いんだろうなというのは21世紀美術館の横でいろいろまちづくりをやっている中ではよく考えたことですけれども、そうはいっても単体でのコストパフォーマンスを請求されてしまうという行政の特有の考え方もあるだろうなというのがありますけれどもそこをもうちょっと広げてみるというのが必要であってその時の言葉が波及効果というものなんだろうなと思ってご説明した次第です。長岡の質問も波及効果についてですよね？

小野寺

では長岡について。お願いします。

樋口

長岡の場合はそもそも中心市街地が小売店が無くなったりしています。アオーレにたくさん人は来られているんですけれどまったく売り上げが上がらないということで商店街の皆さんからは何とかならないかということがあるんですけれど、これは土台

無理な話で売れる物を売らないあなたが悪い(笑)それはともかくですけれどアオーレには100万人来ているんですけれどじゃあその人たちが中心市街地を歩いているかというと全然歩いていかないんですよね。そうすると波及効果はもう少し点で考えるんじゃなくて面で考えて皆さんに中心市街地を楽しんでいただけるような仕掛けが必要だなと考えています。

小野寺

個別の質問を結構いただいていて、ちょっと個別にというふうにはできないので、全体が終わりまして帰りまで少しの時間があると思いますので、個別に質問のある方はその時に各先生方にお願いします。そしてこれは全員に聞いて下さいという質問ですが、コンパクトシティということになってくると行政サービスの受益などの部分で差が出てしまうんではないのか？というようなことを書かれている方が何名かいらっしゃるので、それが立地適正化計画の今後の在り方みたいなことになるのかと思って野嶋先生から答えていっていただけるとありがたいです。

野嶋

これは非常に難しい質問で、多くの自治体で立地適正化計画が策定されていますが土地利用規制では非常に弱いと思われます。策定後、効果のある事例を教えて欲しと、また立地適正化計画の今後の展開があれば教えて欲しい。これは行政職員の方の切実な悩みだと思いますけれど、まだ策定されて数年しかたっていないので効果がというところはまだないんだと思います。しかしそれをどこまで立地適正化計画を使って展開していくかによって全然違ってくると思っていて、例えば誘導区域の外は行政的にはサービスをしないということは絶対ないですけれど手を緩めるなんて暮らしになっ

て来たら皆さん誘導区域に将来的には来ると思うんですよね。ただそこまでやらなくても基本的には誘導を前提として来たい人は誘導区域に来ましょうと、そうではなくて車も持っていて生活できる人は今のままでいいですというようなスタンスが各自治体のものでいいんだと思うんです。ただしそういったことによって中心部の価値というものは上がっていると思うんです。これから何十年間経ってもそこに住みたいと思えればどんどん集まってくるでしょうし、そういったことがなければ今と同じように今のままの生活が続くんだろうなと思っていて各自治体によっても違うんだろうなと思っています。

小野寺

ありがとうございます。長岡は中心拠点にアオーレ長岡があり成功事例ということになってきているんですが長岡も合併してきて他のところから見て何かあれば。

樋口

長岡は市長が当選したのが 1999 年。先ほどは再開発の話しばかりしたんですが、市長が当選した時に市民活動の人たちが持ちあげた市長だったんです。大型店の 1 つを借り上げて市民に自由に使ってくださいという市民センターを作ったんです。そこに 100 万人くらい結構人が入ったんです。先にコトを起こしてから、そこに来られていた人をまちなかキャンパスなどが引き継いでやったわけですね。そんなことで中心市街地はずっとやっていたんですけれども実はその次に市長選があった時に中心市街地ばかりでどうするんだという論争になりまして拠点でいいますとそれぞれの合併地域にそれぞれの拠点のようなものを作ったんですよ。その一つが子育て支援施設というものです。地域地域にお母さんがたくさんおられますので、長岡は凄く雪が降って全然遊べないので室内で遊べるような子育て施設を地域に作っていろんなサポート体制を作ったんですね。そういう目配せをしつつまちなかをやっていくというようなことが現状としてあります。

小野寺

ありがとうございました。浅野先生は差が出ていくというようなことに対してはどう感じていますか？

浅野

私の考えは論点としていつでもそういう問題意識を施策に投げかけることによってバランスをとるために絶対必要な議論だと気がしています。郊外規制をすれば既得権益者が得をするとかニューカマーが入ってこられなくなりますのでどうしてもそういう施策になるということはあるのでコンパクトな議論と対極にある指摘として常に投げかけられるべき指摘だと思います。実際に施策をした時に今回の話しでいうと私が考えているのは少なくとも弱者対策というか、要するに車を運転できない人の生活はどういうふうに担保されるのか？というものが問題なので少なくともそこについては社会的合理性があってある程度そういう人に集まってもらってそこに行けば公共交通の恩恵を受けられるというようなセーフティーネットを作るんだというような論理であれば十分に受け入れられるんではないかなというふうに考えています。

小野寺

ありがとうございます。では、松浦先生いかがでしょうか？

松浦

ちょっと話がズレるかも知れませんけれ

ど、私が後半でお話させていただいた地区拠点の話しで名張の事例を紹介しましたけれど名張で 14 の地域予算を配分しているということでしたが、あれは人口割してしまうと例えば少ない人口のところは予算が少なくなって何もできないそういうこともありまして、そこで人口割という単純なものだけではなくて過疎地域などでは医療負担を多めに配分するとか弱者切り捨てにならないような形で運営しているというようなことを聞いています。

小野寺

ありがとうございます。活動の中で進んでいるところとそうでないところがあるようですけれど？

松浦

先ほどの国津地域は割と先進的にやっていたところで危機意識、放っておくと自分たちのまちが村が無くなってしまうという意識があって、市民の方が自分たちのまちの計画を作って農水省などから補助金をもらって先進的に取り組みをやっていたんです。そういうところは危機意識があっていいんだけれど、例えば住宅団地などでもいろんな地域があって中には危機意識がほとんどないようなところが何処とは言いませんがあったりもするんです。ですので、非常に幅があって人口が少ないところがダメだということでもないんです。

小野寺

ありがとうございます。では内田先生、幅が出てしまうということに対してどうお考えですか？

内田

私は拠点の話しだったのでアレなんですけれども、もともと集中と選択というのはあまりよくないなと思っていまして、トリクルダウンが起きるといっておきたことがないだろうというのが考えとしてあるので、集中と選択というよりはみんなやるべきだろうなと思いますけれど、私がアメリカにいた時にダウンタウンに資源を投入しすぎだろうということがあったんですよね。その時に私がいたアメリカの都市だと各地域で自分たちで手を挙げさせて自分の地域拠点、地域会合というものをやれる人がいるんだとしたら自分で提案して手を挙げてやってくださいと、非常にアメリカ型なんですけれどもそういったことをやっていたんです。さっきの私のプレゼンもそうなんですけれど市民が自分のこととしてできるように関与できる余地が拠点というものには必要なんだろうなというのは思っています。その仕掛け余地や場所を作ってあげることが大事だろうなと思いつつ埼玉ではそういうことがありますので仕掛けを始めようかなというところではあります。

小野寺

ありがとうございました。仕掛けを作るということで考えているのは、今も少し出ていましたけれど標準という言い方が合うかどうかわからないですけれど、低いところは上げないといけないというのはあると思います。交通弱者を救うというようなことです。それで一定のところまでいった人たちに対して名張などのような区域ごとにやっているところ、主体的に動きがあるところには投入されていく仕組みみたいなこ

とを一定のところ以上のことはそれぞれの努力といってしまうと恐縮ですけれどもそのようなことだろうかと聞いていて思いました。というところで質問のあったところはこの辺りまでで、今日は大きな都市の拠点というところから生活密着したできちゃった拠点までいろいろあったのですけれど、拠点っていう非常に曖昧な言葉だったりで、それぞれ関わってきている中で何が大事なのかというものがもしあれば今度は内田先生の方からお願いしたいと思います。拠点作りには何が大事なのか、どういったことを大切にしないといけないのかとかがあれば。

内田

結構そのことについては言ってしまって、自分のこととしてやるしかないという話の中でそうはいいつつも今また新しく仕掛けようとしていることがあってそうすると結構保守性に妨げられるという部分があってどうせやっても無駄だろうというようなところを意見として言われることがあるんです。さっき私は浅野先生もおっしゃったモノよりコトを先に起こすという話で実験的なことをまずやってじゃあ拠点がコトが先にあってモノができたらいいんじゃないかという話をしたんですけれども実はコトを起こすのはまだ楽そうなんですけれども、コトを起こすことにおいてでさえもどうせダメだろうというような反応が起きることが結構あったりするんですよね。どうせ人通らないでしょ？とかどうせ誰も来ないでしょ？とか結構こういう言い方もなんですけれども行政の方からそれが来るんです。市民の方というより。コトなんでやってみましょうよということを皆さんで共有していただきたいのと、コトだし一瞬で終わるしとりあえずやってみようというコト起こしでさえも躊躇する心というのを少し考える必要があるだろうなとはやっている中ですごく思っています。

小野寺

松浦先生も何かあればお願いします。

松浦

先ほどご紹介したシビックコアという地区をできたところ全部回っていまして感じているのは箱モノはすごくきれいにできているところは多いんですけれど、その中の一部を市民の方が使えるようなスペースとして用意しているところも本当に多いんですね。実際に聞いてみると例えば土日は使えないとか、夜５時以降使えないとかかなり制約があって実際ほとんど使われていないところが多いんです。そういう中でさっきご紹介した甲府などの場合はシビックコアの駐車場の管理を市民の方にお任せしてそれだけじゃなくて広場のイベントなども市民の方が企画して運営している。そういう意味でさっきの話ですがコトを起こすような仕掛けを空間の整備と一緒にしているといろんなことがそこで行われるようなことがある。ですから、市民がかかわる余地みたいなものを一緒に用意しておかないといくら空間があっても市民が来てくれないところになってしまうのかなと思いながらいろんなところを回っています。

浅野

では、先ほどいただいた鳥羽市の方からの質問で私が話した飯田市の方が独立性の強い住民故に集約化とか誘導という言葉に強いアレルギーを示しますよという話をさせていただいたのを聞いた上で、下のところで地域の理解が得られにくいということを書いておられますので、ちょっとそこで補足というか飯田市の住民の方が集約化とか誘導の言葉に強いアレルギーを示すということについてはあれだけ活動をやってらっしゃるから十分こちらは理解できますよという意味で申し上げたんですね。逆に何もしない無関心なのに集約化とか何かされるのは困りますよ無関心型の住民の方が一番困ると思うんですよだからそういう方への対処法というのは課題としてあって、そうはいっても予算もない人口もどんどん減ってまわりもどんどん落ち込んでくるということが進んでいくにつれいずれかのタイミングで他人事じゃなくなって考える時が来ると思うんですよね。そこが大きなきっかけでそういうものをきっかけに一緒にやっていくということがきっかけとなるんじゃないかなと感じています。一番困ってしまうのがまだ危機的な状況でなくて私は何もしたくないけれど文句はあるという方はどうしようもなくて、そういう意味でいうと中山間地域というのは危機的ではあるけれど希望はあるからというような気がしているという感じがしています。

樋口

郊外はお任せしておいて私は中心市街地のお話なんですけれども、市民の方で中心市街地ってどうですか？行かれますか？長岡の市民は 28 万人で津とほとんど一緒なんです。28 万人のうち中心市街地に行くというのは数千人くらいだったと思うんですね。何故かというと今日お話ししませんでしたけれどあれだけ百貨店とか潰れて最後 1 つ残っていたイトーヨーカドーが来年の 2 月に撤退するんです。撤退するって新聞にバンっと出たんですけれど誰も困ったって言わないんです。私は家内や近所の人たちと困った困ったと言うんですけれど、たぶん 2 千人くらいしか言わないんじゃないか？だから潰れるんだと思うんですけれどそういう意味でいうと関わると人を増やさないとダメだというのは本当にそう思います。だからまちなかづくり凄く大事だと思っています。ですが、中心市街地無くなってもいいかというと使ってはいないけれどみんななくなっては困ると思っていると思うんですね。やはりまちの玄関が中心市街地なような気がします。玄関だと思っているけれど裏口から入ってきた人たちばかりなのでもう一回玄関にしないといけないと思っています。中心市街地を茶の間のような形にできると、先ほど言った回遊性ですとか賑わいとかもできますのでみんなでもう一回玄関を作ろうとか茶の間にしようというようなことが中心市街地でできるといいなと思っています。

野嶋

まとめますと、議論が錯綜しているんですね。結局、近隣レベルの話しと中心市街地の話しが一緒なわけがないですし、これから全国で人口密度も低くなって高齢化も加わって過疎化が避けられないわけですね。その時にどうやって元気に持続して暮らし続けられるのかというのは仕組みですよね。町内会がしっかりしていれば新しい活動等コトを起こしながら仕組みを行政の仕組みを作っていくというようなことが必要になってくると思うんです。一方で中心市街地とか大きな拠点というのはそれとは違うわけで樋口先生おっしゃったようにやはり市民の誇りのようなものがあるわけですよね。それがあるからこのまちに住み続けようというような、松浦先生が城下町をやっていますが城下町もお城があるから歴史があるからここに来ようというような最後の砦み

たいなものがあって福井もそうです。そういったことでコトというのは大事なんだけれども、いろんなことが連動する必要があると思っていて行政と官民共同で堀を再生するなんてことも大事ですし、そういうふうに連動して市民がそこでコトを起こしたりするのも大事ですし一方で店舗がそこに集まってくるような施策も必要ですし、ですのでコトとそのパートナー、施設などと仕組みというのがどう連動させていくかという部分が一番のキーワードだと思っています。そのためには行政はそれを支援するためのいろんな政策を連動させることが大事だと思うんです。居住政策とか中心市街地の店舗政策ですとか歴史のまちづくり政策ですとかいかにそういうものを連動させながらまちの魅力を高めて価値を高めていくというところが大事だなと思っています。

小野寺

ありがとうございました。連動するということが大事ということで、ちょっと話は違いますが、熊本城などは地震で壊れた時に復興するのに何百億というお金がかかりましたけれど共通認識があるのか誰も反対しないですよね。今回皆さんにお話ししていただいている「地域拠点に着目して」ということでやっているんですけれども、大きなタイトルに「コンパクト＋ネットワークシティ」ということも書いているのでネットワークについては質問もなかったのですが、このタイトルに興味を持ってお越しの方もいるかもしれないので野嶋先生から拠点については何となくわかったんですけれどネットワークとはどんなことがあるのかお話しいただけるとありがたいです。

野嶋

ネットワークは歴史的にも公共交通ですよね。バス、あるいは電車で中心市街地と拠点の間を結べるか、そこでは歩いて、車を使わないで暮らしができるかというということに尽きるかと思います。ただし、地方都市というのは非常に難しいです。市民団体などが過疎地域でいろいろやりますけれどなかなかそれも現実的ではなくて、結局は子どもたちの送迎に頼っているという限界集落もたくさんあるわけです。どうしろというのもなかなか難しいのですが、官民あげて公共交通というものは社会資本なのでインフラだと思うんですよ。だからある程度は税金を投入して、ある程度がどのくらいなのかは議論しながらやっていく必要があると思います。立地適正化計画でない例えば集落間のネットワークみたいなものがありますよね。例えばお祭りができなくなってきたから隣の集落のお祭りをこちらの集落が手伝うとか集落もだんだんと減ってきたからエリアとしての連携でなるべく地域の持続を深めようというのはこれからやっていかなければいけないことだと思います。

樋口

どうしても地方都市だとスーパーマーケットもいろいろな大型店もそうですけれど全部ロードサイドにできてしまって市民でも歩いて行こうなんて人はほとんどいないわけなんですよね。本当にネットワークを考えたいんだとすると発着点と目的地をどう公共交通で結ぶかということを真剣に考えないとネットワークの維持が難しいと思

うんです。その答えの一つが中心市街地をもう一回作り直すと、市役所などが戻ってくるときにその理由の一つには郊外だと自動車がないと行けなかったんですけれどまちなかに持ってくることで凄く行きやすくなったという方がたくさんおられます。ボランティアセンターなどもまちなかに持ってきたんですけれど弱者の対策にもなるよということです。

浅野

特に加えることもないですけれど、非常に難しい状況だと思いますけれども進む方から手を付けて民間主導型の公共交通などを前提にするのであれば維持ができるような体制を作っていくという方法とそうではなくてもう少しヨーロッパ並みに税金を投入していくという対応をするかどちらかしかない。旧国鉄も大赤字でしたのでそういう現状なんでしょうけれど。

小野寺

公共交通といいながら民間に頼っているというようなところがあるといこうとですね。松浦先生ももし何かあれば。

松浦

私はちょっと視点を変えて公共交通だけではなくて拠点での活動のネットワークという意味で地域づくり委員会は年に１回どういうことをやっているのかということの報告会みたいなことをやっていて、そこで話を聞いていてすごく良いなと思ったのはそれぞれマネをするのは良いよとさっきの事例でいろいろなサポートサービスをどこかがやっていたらそれうちでもやりたいなとどういうふうにやっているのか聞いたりして情報のネットワークをしながら良いところを上手く取り入れて全体としてコトを回していくというような仕組みができているんですね。それが割とうまくいっているんじゃないのかなということでそういう意味でコトのネットワークのようなものが名張の場合はあるようです。

内田

今、交通広場のお話を考えているんですけれどそうすると交通広場を作るにおいて今のモビリティのあり方と 30 年後のモビリティのあり方で作り方が違うんだということを見越して設計しているところがあったんですね。交通網の選択が拡大していく中で動く場所が逆に拡大してしまうだろうという議論があります。ただ、ちょっと話を聞いたんですけれどご高齢の方のトリップ数は何十年かの間に凄く増えている。要はあっち行ってこっち行ってとすごく元気に動かれていていい話だなと聞いていて、でもそれは私もプレゼンの中で申し上げた通り目的化した場所がないとトリップ数が増えて行かないんだとは思うんですよね。移動する目的を中心に作ることが一番大事でそれであればそれはもう増えている状況であるので希望が持てるのではないか、なおかつ交通の選択が拡大していく中でさらにトリップ数が増えていくことが期待できるんじゃないかなと期待を持っております。

小野寺

目的をもって人が集まるようになるとト

リップ数が増える。そちらが先かもしれないですね。最後にまとめというか私が今回開催した思いというかですが、拠点にはそれぞれ役割があるということはちょっと理解していただけたかなと思っています。拠点を作ってもその後市民の方が生き生きと使える仕組みまでないとただのハコになってしまう。作ったら終わりではなくてそのあと長い期間ずっと続くような拠点づくりができればいいなと思っていて、今日も行政の方や市民の活動している方などに多く来ていただいているんですけれど、行政任せ市民任せではなくて続いていくような持続可能な拠点が市とか周辺の市町村にできるようになっていったらいいなという思いでそういうところから各先生にお話を頂きました。せっかく昨日から来てもらって今朝も歩いてもらってお疲れだと思うんですが最後に今日のまとめというか津の街を歩いてもらった感想を含めて内田先生から順に松浦先生、浅野先生、樋口先生とお話しいただいて先ほどまとめていただきましたが野嶋先生にもう一度まとめていただいて終わりにしたいと思います。よろしくお願いします。

内田

私からは一言ですけれども本当に津には宝となるような私が特に好きなのは町屋とか武家屋敷などですがそれが残っているのに十分気付いていらっしゃると思いますけれど、素晴らしい資源をいっぱい持っていらっしゃるのでさらに気付いていただければと思います。そういう意味では拠点というのは機能だけではなく物価や魅力があるのも拠点というふうに考えた方が良いのだろうなと、ただそういういうふうな仕組みにはなっていなくてそこかな？と津を見ていて思いました。

松浦

3年くらい前に津の市役所の方から津の中心商店街、大門の辺りについて少し聞かれたことがあってその時に市の方は津の市民の方にアンケートをしてあの辺り必要だと思いますか？というような内容のアンケートだったと思いますが、予想以上に市民の方はあそこの中心商店街を必要だし重要だと考えられていたんですよね。私はそれにすごくギャップがあってずっと15年くらい住んでいてあそこにはほとんど人がいないし僕は津の市民の方はあそこを見捨てているんじゃないかと思っていたんです。昔は中心市街地だったけれどもう必要とされていないような場所。そういうふうに割とクールに皆さん見ているのかなとずっと思っていたらアンケート結果はその逆で皆

さんあそこは大事な場所だよと思われていた。先ほど野嶋先生もおっしゃっていましたけれどそういう思いがまず前提となって拠点形成などが生まれるんだと、求められていなかったら我々はプランナーとして入っていても意味がないのでそういう思いがある以上はそれについて何かしらバックアップとか仕組みなどを提案してより良い中心拠点を作っていけるんじゃないかなと思っていますので小野寺先生を中心に頑張っていただければなと思います。

浅野

私は今日出てきた議論で中山間地域の担当だったので言わなかったんですが、中心市街地の集約化ではやはり建築のデザイン性がもの凄く重要だと思うんです。長岡が成功したのはやはり隈研吾さんがやったからというのもあるんです。レガシーにもなってたぶん30年くらい経ってもそのことは評価されると思うんですが他の再開発ビルどうかなと考えるとそこは非常に重要なんじゃないか。いずれは建て替えるにしてもデザイン性のことをもっと真剣に考えてあげないといけないのかなということがあると思います。それからもう一つは今日はリクエストがあって中山間地域の話をしたんですけれどそのリクエストがなかったら賑わいを作るには飲食機能が重要だというような話をしようかなと思っていたんですよ。ヨーロッパなどに行って感じるのは賑わいを生み出しているかなりの部分で座って食べて話しているんですよ。日本はそれはほとんどないですね。中心市街地の歩行者調査というのは何人歩いているのかとカチカチをやるんですが、あれをやると通っている時間例えば1分だとすると200人歩いていたら、200人×1分なんですよね。ところが、座って30分、1時間いてもらえるとその頭数はもの凄く緩むわけです。誰かいるからそこに入って何か食べようかなとかいう話になって賑わいにつながるその効果があるんですね。今日は内田先生の話しで公共空間では制限があってかなり縛りがあるんですけれど、例えば飲食系の建物が自分の敷地で良いからガラッと開けて道路空間と一体で食べられるというか、食べている雰囲気が分かる設えを作ってもらえるとかなり変わるはずなんです。これは中心市街地だけではなくて先ほど話した中山間地域でも拠点でも例えば拠点の自治振興センターの中に食べて話せる場があればかなり変わるはずです。けれど、そういうところが全くなくて食とか飲食に関する考察があまりに疎かで遅れすぎているのが日本かなという気がしますので、そういう観点でいうと津はそういうふうになっていないなと思ったんですが、ただ和菓子屋さんとかに行って食の集積が非常に豊かだとびっくりしたので上手くされると凄いポテンシャルなのにという感じがしました。

樋口

建築のデザイン性ということで、見えるということでは先ほどのアオーレはほとんどがガラスです。1階に議場があるんですけれど、議場も見えるんです。議会でどんな人が何を喋っているのか見えるんですけれど議員さんが周りが見えていると気になってしょうがないとスクリーンを下ろしちゃってよくわからないことになってしまっているんですけれど、でも活動が見えますので市民活動でも全部見えるのでそうなるとそこで練習したいという人もたくさんおられて、要するに見ている人は見てるし開けているというのが非常に心地いいというような感じがあるんですね。浅野先生もおっしゃいましたけれど飲食店もすごく外に開くというようなことが求められるかもしれません。地方都市の研究者たくさんいますけれど、以前は日本でも6割くらいは地方都市の研究者だったんですけれど今は半分切ってしまっているんです。日本全体の人口が減少する中でこれから先、地方が光

り輝かないともっと歪な人口構成になっていくんだと思います。津も 28 万人、長岡も 28 万人でそれくらいの都市いっぱいありますし、40 万人くらいの都市もたくさんあります。そういうところが連携して中心市街地で同じものを売るんじゃなくて津のものが長岡で、長岡のものを津で売るとかそういうようなネットワークができるといいなと思います。

小野寺

デザイン性は本当に大事だと思っていて、やっぱり都市は美しくなければならない。美しくあるいはオシャレじゃないと人が集まらないというのが難しいですね。最後に野嶋先生お願いします。

野嶋

僕は津に久しぶりに着て駅前から大門商店街の方面に先ほどおっしゃっていたデザイン性でいうと銀行の建物とか岡三証券ですとかいいものが残っているというのであの通りというのはこれからまだまだ可能性があると思うんです。その西側に城址があって東側には大門商店街とか大きな商店街がありますよね。福井などに比べたらとても大きな商店街なので、僕は商店街とかって可能性があるので大きければ大きいほどいいと思っているんです。福井はちょっと小さいです。大門商店街でもこれからいろいろな取り組みが行われつつありますよね。若い人が店舗を出したり、いろいろそこで遊べる活動できますし、歴史と近代の商店街とが回遊して歩ける楽しい街が必ずできてくると思うので先ほど内田先生がおっしゃったように魅力ですよね。中心市街地で大事なのは市民の誇りですよね。誇りが持てるということ、魅力があるということ、何百年歴史があっても中心市街地以外ないわけですから工場やショッピングセンターでは歩けないそういった生活の豊かさを感じてこれからどうやったらまちづくりできるかということがキーになってくると思います。僕は学生によく言うんですが福井のまちもそれほど中心商店街というのはないんですよそれで郊外に行ってしまった人がたくさんいるのですけれど、仮にヨーロッパ人がここに来たらどこに行くかというとやっぱり今の商店街でそこで集まったりカフェしたりもちろん働いたりというそういったところの生活の豊かさというところで魅力的な拠点をこれからいかに作れるかというのが津の目指すところではないかなと思います。

小野寺

ありがとうございました。質問をいただいたものに上手く答えられていないところもあったかと思いますけれど既定の時間も過ぎていますのでこれでシンポジウムを終了したいと思います。

地域連携センター長

本日は本当に長時間に渡って熱い議論をしていただきましてありがとうございました。私も専門とは全然違う分野ですけれど地域連携センター長をやっておりますのでどうやったら津がもっと魅力的でいい街になるかなというのを最近よく考えるように

なっているわけですけれど、どちらかというともう手遅れかなと思いつつあったんですけれど、今日話を聞いていると外部から来ていただいた方から見ると魅力もあるようですし捨てたもんじゃないということですので、話もいろんなところでいろんなことが行われている事例も聞かせていただいて、絶対的にこうすれば成功するという答えがあるものではなくて成功するかどうかわからないけれどやってみて上手くいけば成功するくらいの気持ちでどんどんいろんなことに取り組んでいくことが地域の魅力がわかる気がする、あるいはそこで活動をする人を増やしていくということで成功に近づいていくのかなと聞いていて思いました。本当にこれから全国で問題になる重要になってくるテーマだと思いますのでまた機会がありましたら是非津に来ていただいて続きをお聞かせいただければと思います。

本当に貴重なお話ありがとうございました。今日の講師の皆さんに拍手をお願い致します。本日はどうもありがとうございました。

（終了）

編集後記

今回の地研通信は、第133・134合併号となります。地域問題研究交流集会と地域連携講座との共催で開催された「地方都市における持続可能な“コンパクト+ネットワークシティ”の形成に向けて」の講演とパネルディスカッションの様子を掲載しています。小野寺一成先生をコーディネーターに、5人の先生方の貴重なご講演をいただき、津市の良さを改めて考える良い機会となりました。ぜひご一読ください。

AK